

## もちつもたれつ



## 山延 健

群馬大学大学院工学研究科応用化学・生物化学  
専攻  
教授, 工学博士.  
[376-8515] 桐生市天神町 1-5-1  
専門は高分子構造, NMR.

「男女共同参画」は政策としても推進されており、大学内においては最もやり玉に挙げられるのが工学部であろう。自分も大学入学時、工学部であったが、女性は1%しかおらず、現状は仕方ないのではとも考える。しかし、少子高齢化を考えると今後の社会において女性の労働力としての役割は重要であり、工学部だからと他人ごとのように構えているわけにはいかない。現在、私が所属している学科では、女学生の割合が約40%である。おそらく、これは工学部の中ではかなり高い数値である(かかあ天下で有名な群馬県であり、働き者の女性が多い土地柄であるが、群馬県出身者は半数程度であることを考えるとやはり高い数値である)。全員に言うとは差し障りがあるので研究室の女学生には今後の社会のことを考えると結婚してもできるだけ仕事を続けるように伝えている。そうは言っても女性の場合にはさまざまな事情で仕事をやめざるを得ない場合が多い。その理由として最も多いのが子育てであろう。学内で男女共同参画を議論する場合でも子育ての問題が中心である。自分の場合も、つれあいが同業者であり、子育てに関しては苦勞した。現在、子供は大学生になり、良い子育てであったかどうかは別として、なんとか乗り切ったというのが本音である。というのも、子供はいつ熱を出すか予測できないし、こちらも自分しか対応できない仕事がある。何とか乗り切ったというのは大学の教員の場合、時間を自分でコントロールできるという面もあるが、それよりは使うことのできる周りの協力は遠慮なく利用したことが大きいと考えている。私どもの場合、両親は遠く(岩手と広島)、急なお願いはできない。また、私自身も単身赴任であり、その意味では妻の負担はかなりのものである。長時間保育(7:00~20:00)の保育園、学童保育利用はもちろんであるが、近所の人など知り合いにかなり図々しくお願いした。2女の出産のときなどは、夜中の2時頃に陣痛が始まり、自分は単身赴任先で何もできず、妻の大学の看護婦さんに病院に連れて行っていただき、長女は自宅で近所の方に見ていただいた(翌朝、自分

が帰宅したときにはすでに2女は生まれていた)。また、仕事の都合でどうしても保育園の時間内に迎えに行けないこともしばしばであったが、保母さんは、嫌な顔もせず「お疲れさま」と筆者らを迎えてくれた。これも、働く母親を支援したいという信念の園長の理解があったおかげである。子育てをしているときには、どうしても周りに迷惑をかけず自分たちだけでという考えになりがちであるが、これから子育てをする人には是非、使うことのできる繋がりや遠慮なく使うことをお勧めしたい。迷惑をかけるのは確かであり、感謝することはもちろんであるが、それは後の人に返してあげるといってよいと思う。自分も自宅に戻るときはできるだけ近所の行事、町内会活動には協力している(平日は仕事、休日は町内会活動で家庭内ではあまり評判はよくない面もあるが)。

男女共同参画を進める立場から考えると職場においてはいかに遠慮なく利用できるシステムを構築するかではないかと思う。働きやすい職場だけでは不十分である。一番問題なのは子供が病気になったときなどの非常時における対応である。普段がいくら働きやすくても非常時に融通がきかないと意味がない。子供が病気になったが、その際の手続が煩雑で結局、利用できないようなシステムでは無駄である。さらに重要なのは周りの理解である。理解といっても甘く見ることではなく、プラスにもマイナスにも見ないことが必要ではないか。育児をしているから昇進はダメというのはもってのほかであるが、昇進時に甘くするというのは女性であれ、男性であれ、本人の力を正当に評価していないという意味では失礼である。先に述べたように子育ての当事者は母親であれ父親であれ、どうしても周りに対して借りを作った気持ちになってしまう。周りの者が貸しがあると考えているようであればその引け目はさらに強くなる。貸し借りではなく、お互いもちつもたれつという気持ちをもつことが重要だと思う。